

関帝廟は三国時代・蜀漢の猛将関羽の故郷、山西省運城市解州に位置しています。隋の開皇九年(589年)に創建され、宋の時代に拡大され、明と清の時代に再建されました。宮殿式^注と言われる建築群は雄大で、中国にある関帝廟の祖とされています。

関帝廟の配置は南北二つに分けられています。南部は結義園で、北部は主廟です。敷地面積は14万m²で、国内に現存する関帝廟としては最も大きいものです。

■主廟

中軸線の北端が主廟で、多層的に展開する巨大な建築群です。主に瑠璃の龍壁、端門、午門、御書楼、崇寧殿、刀楼、印楼、春秋楼と数多くの牌楼で構成されています。現存している建築はほとんどが明・清時代のものです。

ここに祀っているのは関羽です。山西省運城市解州鎮常平村の出身でした。劉備、張飛と義兄弟の約束を結び、義勇の人として知られ、劉備を助けて功がありました。219年に魏、呉両軍に攻められ、呉の馬忠に殺されました。関羽はその悲劇的な最後と、主君劉備に対する忠誠心によって、歴代の帝王と庶民に深く哀悼され、各地に関帝廟が建てられるようになりました。

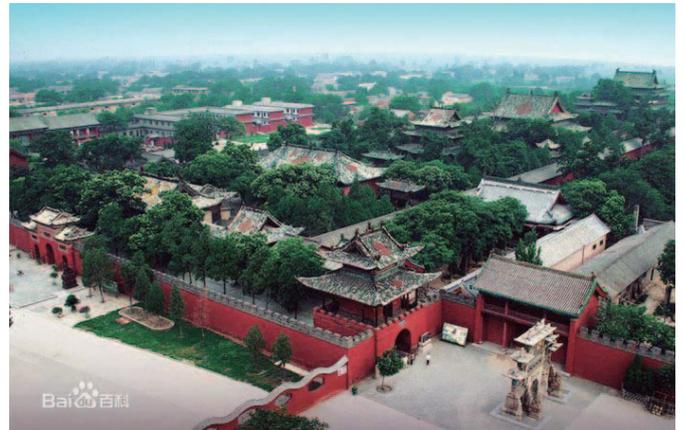
■端門

主廟の入り口のレンガで建てられた建築は「端門」と呼ばれています。三つの門があるから「三門」とも呼ばれています。真ん中の門が高く、左右の門がやや低いです。真ん中の門に「扶漢人物」と書いてあります。関羽が漢を助ける英雄という意味です。右の門には「精忠貫日」、左の門には「大義参天」と書いてあります。両方とも関羽の「忠義」を讃えています。

端門の前には3本の鉄棒が立っています。関羽に尊敬を払う為に、文官にしても武官にしてもここからは歩いて中に入るわけです。

■瑠璃影壁

この瑠璃龍壁は民間住宅の目隠しの壁に当たり



解州関帝廟遠景



端門 (山西省観光局ホームページより)

ます。瑠璃は明の時代に作られました。600年経ってもまだ色鮮やかです。全体の構図から言うと、天、地、海の三界に分けられています。その間を4匹の龍が漫遊していて、周りには鳳凰、麒麟、玉兔がいて、とても豪華です。中国の古代の龍壁は普通龍の数が1、3、5、9匹ですが、ここの龍は4匹です。何故かというと、関羽は実際には皇帝になった事はありませんが、死後に帝に封じられ関帝と呼ばれるようになったからです。

■雉門

端門を抜けると「雉門」に入ります。俗に「大門」と呼ばれています。門楼には「関帝廟」の額が掛かっています。昔、この門は一般の人は通る事は出来なく、皇帝しか通れませんでした。「大門」の両側には「文経門」と「武緯門」があります。この二つの脇門は文武官、王侯貴族などの専用でした。

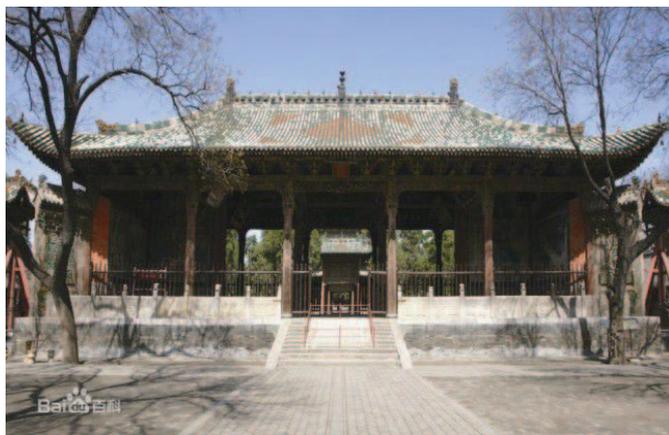


雉門

「文経門」の東側には「武将祠」と「崇聖祠」があります。「武将祠」には関羽傘下の武将である楊儀、王甫、張累三人の色彩塑像が安置されています。「崇聖祠」には関羽の曾祖父、祖父、父の位牌が安置されています。「武緯門」の東には「追風伯祠」と「胡公祠」があります。「追風伯祠」は赤兎馬のために建てられたのです。赤兎馬は全身が赤く、一日千里を走るといふ名馬です。呂布が董卓から贈られ、その死後、関羽の愛馬となりました。関羽が亡くなってから、孫権の武将・馬忠が手に入れましたが、餌を食わず死亡しました。明代の万暦帝がその忠誠心を感じ、追風伯を封じて祠を建てられたのです。「胡公祠」は関羽の岳父のために建てられたものです。また「雉門」はお祭りや縁日の時には階段の両側に板を置いて舞台になり、「三国志演義」の演目などが上演されます。

■石坊

石坊は370年前の明の時代に建てられました。石坊には三国の物語が浮き彫りで彫刻されていま



午門

す。例えば「呂布討伐」、「三顧の礼」、「顔良を斬る」、「文醜を誅す」などの彫刻がとても巧みで、真に迫っています。

■午門

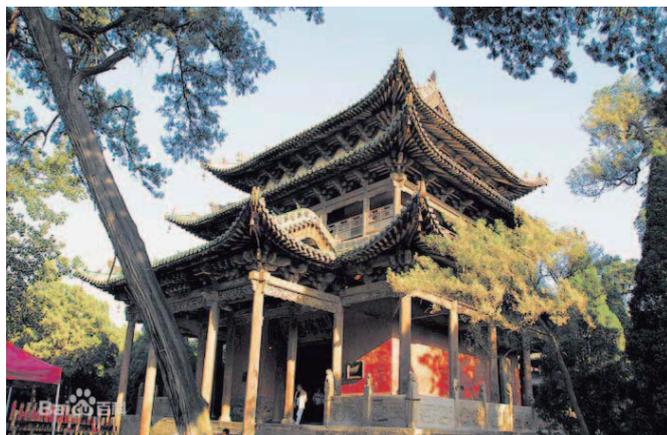
「午門」は皇帝宮殿の正門です。普通の寺廟には設ける事が許されませんが、明の万暦年間に関羽が帝に封じられた後に建てられ、1920年に再建されました。「午門」に上がると、正面の壁画に周倉と廖化が描かれています。周倉は山西省平陸県の人で、専ら関羽のために青龍偃月刀を持ち、関羽の片腕となって働いた人です。廖化は蜀の大將、関羽の最も親しい部下、後に劉備の息子の劉禪の下で中郷侯となりました。二人ともこの関帝廟の守護神になっています。東と西の壁には青龍と白虎が描かれている壁画があり、元々は道教の道観に属していました。

■御書楼

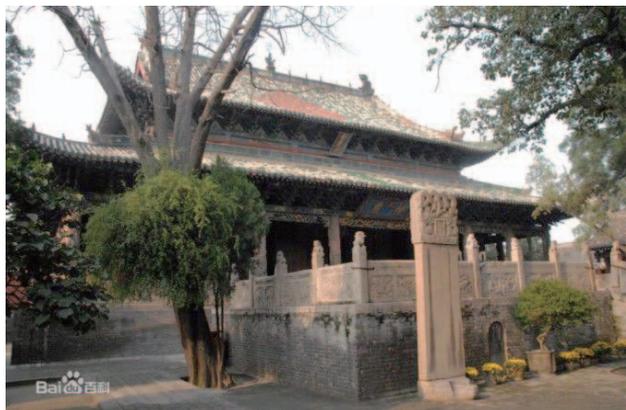
この高い建物は「御書楼」と呼ばれています。元の名前は二階の天井が八卦によってデザインされたことから「八卦楼」と呼ばれました。石碑の記載によると、清の康熙帝は1703年に西へ巡幸をした時にこの関帝廟に寄り、「義炳乾坤」との親筆を残しました。今、その扁額は「崇寧殿」に掛かっています。後に清の乾隆帝が祖父の康熙帝の題字を記念する為に、「八卦楼」を「御書楼」に改名しました。

■崇寧殿

崇寧殿は関羽を祀っている本殿です。宋の時代の徽宗が関羽を「崇寧真君」に封じたことからその名をつけたのです。崇寧殿の前には祭壇があり、昔は祭祀を行う所でした。本殿の軒下に清代の咸豊帝直



御書楼



崇寧殿



崇寧殿のご本尊

外側の回廊からは周りの景色を見下ろす事が出来ます。春秋楼の両側には「刀楼」と「印楼」が建てられています。古代、「文印武刀」は権力の象徴でした。関羽は「青龍偃月刀」を持って赫赫たる戦功を立て、その複製品が「刀

筆の「万世人極」との扁額が掛かっています。殿内には帝王装を纏っている関羽の塑像が祀られています。手には笏を持っています。

■ 后宫

関帝廟は宮殿式の建物で、「外朝」と「内廷」に分かれています。ここからは「内廷」の「后宫」に入ります。「后宫」の正門に入ると四季折々の花や緑がいっぱいあって別世界に感じられます。ここにはかつて娘娘殿(後の住まい)と関平、関興の太子殿がありましたが、1947年に戦火で破壊されました。

■ 春秋楼

「后宫」の北側にある2階建ての高い建物は「春秋楼」と呼ばれています。関羽が「春秋」を愛読したのでその名が付けました。「春秋楼」は高さ30m、関帝廟の中で一番高い建物です。明の時代に創建されましたが、火事にあい、清代に修復されました。2階には「春秋」を読んでいる関羽の等身大の塑像が安置されています。関羽は武を誇る一方で、学問を好み、「春秋左氏伝」をほぼ暗誦出来るなど、文武両道の面をもっていました。厨子の周りの板壁に「春秋」全文が刻んであります。力強い楷書です。



春秋楼

楼」に展示されています。「印楼」には関羽が曹操から「漢寿亭侯」に封じられた時の印の複製が展示されています。

■ 官界における関羽

政治面から見ると、乱世の中で特定の個人に対して忠誠を尽くした関羽は、為政者から見ると賞賛すべき人物でした。そのため、北宋の徽宗皇帝が爵諡の「忠恵公」後に「武安王」として封じ、「崇寧真君」としました。明初には神号「協天護国忠義関聖帝君」に封じ、清代に入ると順治帝が「忠義神武関聖大帝」として、後に宣統帝が「忠義神武靈祐仁勇威顯開聖大帝」と次々と追贈していました。多くは王朝初期と末期に追贈されていました。清代には県に必ず関帝を祀る武廟を建立させました。現在では関帝廟が多く各地に残っています。

■ 民間における関羽

関羽は後世の人間が神格化し、関帝(関聖帝君、関帝聖君)とし、神様としました。信義に厚い事などから、現在では商売の神様として世界中の中華街で祀られています。算盤を発明したという伝説まであります。日本では横浜中華街と神戸南京町の関帝廟が有名です。ここ、運城の関帝廟では毎年旧暦4月8日に祭祀が行われ、沢山の人が訪れています。

■ 注

宮殿式：関羽は死後皇帝に封じられたので、関羽を祀る場である関帝廟は皇帝の住まいである宮殿にのっとった建築様式で建てられている。

※掲載写真は、「端門」を除き中国「百度百科」の「解州関帝廟」から転載